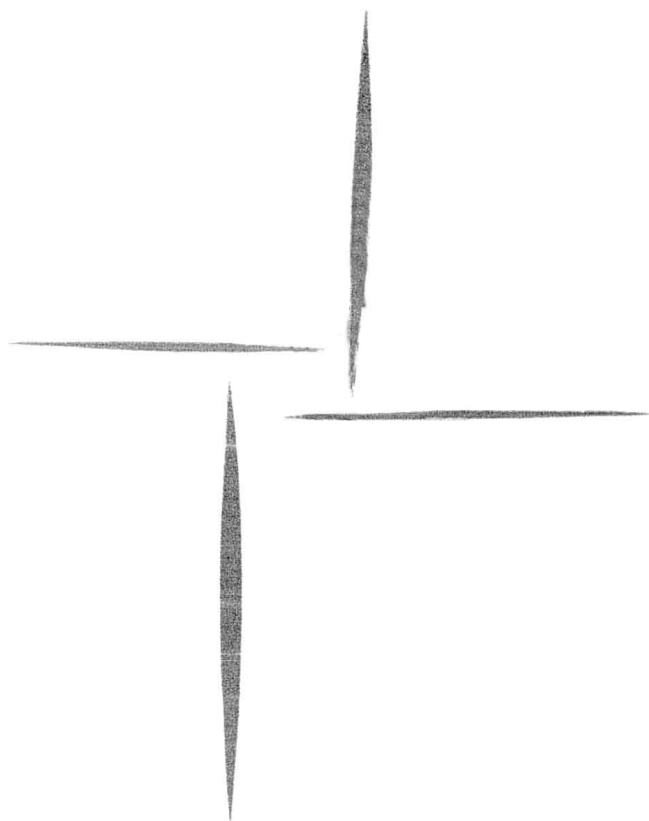


近代文学注釈大系

森 鷗 外

校訂・注釈・解説 三 好 行 雄



有 精 堂

近代文学注釈大系

森 鷗 外

昭和四十一年一月二十日 初版発行
昭和四十四年四月十日 三版発行

著 者 三 好 行 雄
み よし ゆき お

発 行 者 山 崎 清 一
東京都千代田区神田神保町二ノ元

印 刷 者 鈴 木 貞 三 郎
東京都文京区水道二丁目二ノ一

発 行 所 有精堂出版株式会社
東京都千代田区神田神保町一丁目三十九番地
振替口座 東京四〇六八四番

整 版 株式会社井村印刷所
印 刷 公和印刷株式会社
製 本 誠光社印刷製本株式会社

定 価 850 円

は し が き

一、本書は森鷗外の多彩な作品のうち、小説・評論・随筆の各ジャンルから十五編をえらんで収めた。人間鷗外の足跡と奥ゆきとを、多少とも髣髴するように配慮したつもりである。

一、本書の目的は、一般読書人の味読・鑑賞に資するだけでなく、中学校・高等学校教官の研究資料として、また、大学・短期大学での講読演習の手引として編纂したが、かたわら、鷗外研究の基礎作業としての意味も幾分かは持たせている。

一、本書に収めた作品は、作品の一部の抄出ではなく、すべて完全なかたちで収録し、できる限り詳しい注釈・鑑賞・解説を加えた。

一、本文は原則として岩波版第二次全集本（決定版）を底本とする。ただし、『志がらみ草紙』の「本領を論ず」および「柵草紙の山房論文」は、当時の雰囲気を再現するため雑誌初出本文を底本とした。「仮名遣意見」をのぞく全作品にわたって初出本文（柵草紙関係の論文は全集本文）との主要な異同を頭注で指摘した。

一、各作品の末尾には発表年月を記入した。

一、本文の表記は、漢字、仮名づかい、段落の切りかた、句読法、符号の用いかなどすべて底本に

従った。ただし漢字は特殊な例をのぞいて新字体を用い、振り仮名は現代仮名づかいに改めた。

一、頭注は人名・地名・書名などの固有名詞に重点をおいたが、典拠の考証、主題の展開、作品の特色、とくに素材となった事実、資料との関連、典拠の辞句、先行の批評や研究の成果をとりいれ、読解・研究の便宜をはかった。ただし、紙幅の制約のため、外国語や特殊な専門用語などをのぞく語句の注釈は従とした。

一、頭注は原則として見開き二ページに通し番号をつけて収めたが、さらに説明を要すると認められるもの、および収めきれないものうち主な項目を補注として巻末へ移した。

一、解説は作家解説と作品解説をひとつにまとめた。本書所収の作品を主として言及したが、あわせて鷗外文学の全容や文学史的意義をも明らかにできるよう配慮したつもりである。

一、年譜・参考文献などを掲げ、鑑賞・研究の利用の便をはかった。

一、なお、この稿を成すにあたり、多くの先学に直接・間接の示教を得たことはいうまでもない。研究文献の引用をふくめて個々に明示しておいたが、とくに筑摩書房版「森鷗外全集」にほどこされた関係作品の注解に多大の恩恵をうけた。とりわけ同第三巻所収の歴史小説を担当された尾形仿氏の仕事には、きわめて多くを負っている。記して、深甚の謝意に代える。また有精堂の松土好子氏にも煩雑な調査について協力していただいたことを感謝する。

昭和四十一年一月

目次

舞姫	一
半日	三
普請中	四
妄想	五
かのやうに	七
阿部一族	一〇
最後の一句	一四
高瀬舟	一五
寒山拾得	一六
「志がらみ草紙」の本領を論ず	一八
柵草紙の山房論文	一八
鷗外漁史とは誰ぞ	二六

仮名遣意見	二六九
空車	三三
なかじきり	三七
補注	三一
解 説―人と作品―	三一
主要参考文献	三六
年 譜	三八

舞 姫

一 舞姫 ↓ 補注一

二 熾熱燈—arc-light (アーク燈) の訳語か (須藤松雄、筑摩版全集第一巻所収注解、以下須藤注と略記)。炭素棒に電流を通じ強い白色光を放たせる装置の電燈。

三 「ホテル」 「独逸日記」では旅店、客館などの訳語をあてて。「舞姫」でホテル、ニル・アドミラリイ(後出)などの原語がそのまま残されたのは、「統計について」(明治二二)で次のようにいうとおなじ配慮からであろう。「彼のランプを燈と訳する事の行はれざるは、行燈と混ざるの憂ひあればなり。テニブルを机と訳する事の行はれざるは、我邦(わがくに)に有り触れたる机と混ざるの憂ひあればなり。」

四 五年前 ↓ 補注二

五 セイゴン Saigon 現在南ベトナムの首都。シナ半島の南部、メコン川の三角洲上にある。

六 珍しげにしろしを、を「初出(國民之友)」には「珍しげに細叙したる。」とある。↓補注三

七 ニル、アドミラリイ—*nir admirari* (ラテン語) ホラテウス(ローマの詩人)の「書簡詩」

第一巻第六書簡の一行目に出てくる言葉。なにとても驚かないこと。外界に左右されないで生きる冷淡な態度、精神をいう。

八 東に還る「闊外自身の航海日記に、「航西日記」(往路と「還東日乗」(帰途)がある。

九 ききのふの是は……瞬間の感触—きのう良しとしたことでも今日はもう駄目だと思ふ、そんなふうにとその時々にはさだめない自分の印象の意。「わが瞬間の」初出には「己が瞬時の」とある。初出と底本を比較すると、翻訳調や漢文調の和文をかけたあとが見られる。

二 別に故あり ↓ 補注四

三 ブリンデイシー Brindisi アブリア半島の北東岸、アドリア海の入口にあるイタリーの港。

三 生面—初対面。熟面の対。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の暗れがましきも徒なり。今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日なりておもへば、穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにしろしを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンデイシーの港を出で、より、早や二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にの

一 瑞西—Swiss アルプス山脈が国内を走り風光明媚(めづり)の国として知られる。
二 伊太利—Italia 西洋文明の発祥地で、史蹟、遺蹟が多い。

三 賜日ごとに九廻す—うれいなやんで、賜がいづたも回転する、の意で、苦痛や憂悶のはなはだしいことの形容。司馬遷(しはせん)の「報任安書」に「賜一日ニ九回ス」などとのある。

四 房奴—船室付きのボーイ、給仕。

五 文に綴りて見む—悲痛な体験を客観化することによって、事件と主体とのあいだに距離感が生じ、一種のカルシスふうな慰藉(いしや)が期待されているのである。

六 庭の訓—庭訓(ていきん)。家庭教育。豊太郎の受けた教育が儒教的、封建的なものであったことはのちに明らかになる。

七 旧藩の学館—藩校(はんこう)。封建時代に、諸藩が藩士の子弟を教育するために設けた学校。隅外も津和野藩の養老館に学んだ。

八 豫備費—大学予備門。明治十年に東京医学学校と東京開成学校が合併して東京大学が設立された時に、その予科として設けられた。現在の東大教養学部(旧一高)の前身である。

九 十九の歳—隅外は明治十四年に公称二十二才、実年齢二十才(教養年)で大学を卒業した。

一〇 平タ・セク・スアリス—「七月に大学を卒業した。表面の年齢を見て、二十になつたばかりで学士になつては珍らしいと人が言った。実は二十にもなつてはあなかつた」→補注五。

一一 命を受け、……勇み立ちて—初出には「命を受けぬ(改行)我名も成さんも我家を……」とある。「五十を踰えし母」は原稿で最初「四十を踰えし母に推譲されたもの。な、この前

に現存するように推譲されたもの。な、この前

後、一身の功名を願う心が「我家を興さむ」という家名再興の意識と重層しているの注意(立身出世主義)と、封建的な家の觀念との結合が見られる。

み籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、賜日ごとに九廻すともいふべき惨痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見ること、鏡に映る影、声に応ずる響の如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか此恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すが／＼しくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の来て電気線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出て、豫備費に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して二課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々と家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模倣たる功名の念と、檢東に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪(みちのけ)の如きウンテ

二 新大都—当時のドイツはウイールヘルム一世(後出)による統一完成からまもなく、新興近代国家のはつたつたる氣運にみちていた。

三 大道髪(の如き)大道のまつすぐなさまの形容、儲光儀の「洛陽道」に「大道直キコト 髪ノ如シ」とある。

三 ウンテル・デン、リンデン—Unter den Linden(菩提樹の下)の意。ベルリン市の中心部、東から西に延長約千三百メートル、幅六〇メートルの大道。歩道、車道、騎馬道、散歩道を区分する四列の菩提樹Lindenを植え、花壇・噴水などを設けた公園式道路である。

四 維廉一世—Wilhelm I. Friedrich Ludwig (1797—1888)プロイセン王。ヨスマルク(後出)モルトケ(參謀總長)らを重用してドイツ統一に成功、ドイツ皇帝となった。晩年前後二回にわたつて暗殺を企てるものもあつたが、一般に老皇帝と呼ばれて国民から親しまれていた。

五 街に臨める窓—ウイールヘルム一世の宮殿はウンテル・デン・リンデンの東端南側に、直接通りに接して偉容をほこつていた。

六 土瀝青—瀝青とも書く。タールを蒸溜してできる濃褐色または黒色の粘質物質。道路の舗装。木材の防腐剤などに用いる。

七 ブランドブルク門—Brandenburg ウンテル・デン・リンデンの西端にある門。巨大なドリア式円柱によつて五つの通路に分かれ、その上に四頭の馬に曳かれた勝利神像をいたゞく。

八 凱旋塔—Sieges-Gäule Brandenburger 門の西北、ケーニヒ広場 Königs Platz にある。高さ六十メートル余。普墮、普仏兩戦争の勝利とドイツ統一を記念して建てられたもの。大円柱の頂上に金色の勝利の女神像を飾る。

九 普魯西—Preussa ドイツ帝国の「地方。プロイセンともいう。かつてはドイツのもつとも強大な一王国で、ドイツ統一の中心となつた。当時、日本ではドイツ全体をプロシヤとも呼んでゐた。

ル、デン、リンデンに来て両辺なる石だゝみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩簷えたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に倚り玉ふ頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろ／＼の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランドンブルク門を隔てゝ緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しものゝ応接に違なきも宜なり。されど我胸には縦ひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じて、おほやけの紹介状を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、我が故里にて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは學び得つと問はぬことなかりき。

さて官事の暇あることに、かねておほやけの許をば得たりければ、二、三の大学に入りて政治學を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第に拂り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、つひには幾巻をかなしけむ。大学のかたにては、穉き心に思ひ計りしが如く政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵に列るにおもひ定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。

「さて官事の暇……得たりければ」さて故郷を出でしとき公けの許しをば兼ねて得たれば公事の暇あることに」(初出)

三 ところの大学——ベルリン大学→補注六

三 政治家になるべき特科——官吏としての実務に練達するための学問、の意であらう。主人公のこの自覚には、軍陣医学の研究および「事務取調」(「独逸日記」明治二〇年十一月一日参照)を目的として留学した鴈外が、ベッテンコッフやコッホに就いて、むしろ衛生学・細菌学などの基礎医学の研究に専念した事実が反映しているのかもしれない。

一 所動的——初出「被動的」。と *passiv*

(独)の訳語。受動的。消極的。

二 自由なる大学の風→補注七

三 まことの我——初出「真の『我』」。ここに語られているのは近代的自我の覚醒である。それはなかつ鴈外自身の痛切な体験でもあった。

四 獄を断ずる——裁判の判決を下す。なお、以下「悟りたりと思ひぬ」まで、初出は「獄を断ずる法律家などとなるに宜しからぬを發明したりと思ひぬ」とある。

五 余は私に——境に入りぬ「豊太郎の自我の覚醒を告げるこの一連の文章は、まさに日本の近代文学における思想の青春の象徴である」(長谷川泉)。その覚醒の過程は「まことに理路の整然たるものがあること、とうてい『浮雲』の比ではない」(猪野謙二)などという評がある。

六 蔗を嚼む——佳境におなじ。「竹書」の顧愷之伝に「甘蔗ヲ食フ毎ニ常ニ尾ヨリ本ニ至ル、人或ハ之ヲ怪シム、愷之曰ク、漸ク佳境ニ入ルト」とあるにもとづく。顧愷之は明代の画家。七 俱に麦酒の杯を——「独逸日記」には、日本人留学生と交歓してカルタ、撞球にたわむれ、パノラマを見、舞踏会に行き、ともに杯をあげる鴈外の姿が描かれている。↓補注二四参照。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨めすが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの私は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を誦して獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらいへしつる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべしなど、広言しつ。又大学にては法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懷きて、人なみなならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆へすに足らざりけんを、日比伯リンの留学生の中にて、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ關係ありて、彼人々は余を猜疑し、又遂に余に讒誣するに至りぬ。されどこれとても其故なくてやは。

彼人々は余が俱に麦酒の杯をも挙げず、球突きの手をも取らぬを、かたくななる心と慾を

へ我心は処女に似たり」我心は臆病なり我心は処女に似たり」(初出)

「弱くふびんなる心」豊太郎の性格的、内面的な弱さが指摘されている。それは「弱き心」「特操なき心」などといかえられながら、覚醒をよげた自我内面の脆弱な部分として、悲劇の誘因を形成してゆくことになる。

○普魯西にては貴族めきたる鼻音「フランス語などに多い鼻音が、プロンヤでは貴族ふうな感じをあたえる、という意。初出は「一普魯西にては貴族めきたる鼻音」とある。
二「ラエマン」Lebemann(独) bon vivant(仏)の独語訳。道楽者。ゲイ・ボーイのたぐいか。須藤注は隅外の「公娼廃後の策如何」に「牛の宿めともまた余りあり。西洋の大都にては呼ぶ路易といふ。高き黒帽を戴き、明色の外套を被、羊皮の手袋を穿き、早朝に僻街にて己れが管する女兒の微宵して贏(か)ち得たる錢を奪ひ、その少きを憤(い)りてこれを打つ」とある種類の人間、とする。

三「獸苑」Tiergarten プラテンブルグ門に隣接する大公園。當時は皇帝の私有地だったが、二五五ヘクタールの土地を占め、市民の憩(やすみ)の場所として知られていた。
四「モンビシ」モウ街 Moulin Rouge 街の東端から北へ約六百メートル、シュブレール川の北岸にある。
五「クrostel 巷」Kroster Street「独逸日記」では「僧房街」と訳されている。ウンテル・デン・リンデンの東端から東へ約一キロ、シュブレール川の右岸(東岸)の地域にある街。補注八「古寺」クrostel 街はその名のとおりに古い寺院が多い。もつとも有名なものにクrostel・キル・ Kloster-Kirch やマリエン・キル・ Marien-Kirch がある。十三世紀に建造されたベルリン最古の建築。その後数次の増改築が加えられている。全容が完成するのは一五五、六世紀で、後出の「三百年前の遺跡」というのはその間の事情を指しているであろう。

制する力とに帰して、且は嘲り且は嫉みたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎(いか)でか人に知らるべき。わが心はかの合歡(かっくわん)といふ木の葉に似て、物触(ものふ)れば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学(まな)ぶの道をたどりしも、仕(つか)うの道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍(たにん)の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどせたる道を、唯だ(ひと)一条にたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄てゝ顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯外物に恐れて自らわが手足を縛(ばく)せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、又我心の能く耐へんことをも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るゝまでは、天晴豪傑(あはれ)と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなか／＼に我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、又早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。赤く白く面を塗りて、赫然(かっせん)たる色の衣を纏(まと)ひ、珈琲店(カフェ)に坐して客を延(ひ)く女を見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高く帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふ「ラエベマン」を見ては、往きてこれと遊ばん勇氣なし。此等の勇氣なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らんやうもなし。この交際の疎(う)きがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみならず、又余を猜疑することゝなりぬ。これぞ余が冤罪(えんざい)を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難(がいなん)を閲(み)み尽す媒(なぐさ)なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑(じゅうえん)を漫步して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我が「モンビシ」モウ街の僑居(きいきよ)に帰らんと、クrostel 巷(こう)の古寺(こじ)の前(まえ)に来ぬ。余は彼の燈火の海を渡り

一 薄暗き巷一隅外は留学當時に、このクロステル街に住んだことがある。「独逸日記」明治二十年六月十五日の記事に、「居を衛生部の傍なる僧房街 Kloster Strasse に転ず……府の東隅所屬古伯林 Alt-Berlin に近く、或は悪漢淫婦の巢窟(そうくつ)なり」といふものあれど、交を比鄰(ひりん)に求むる意なければ、厝(せつ)とすに足らず」とある。「古伯林」はシュプレー川の右岸で、環状線(鉄道)の内側をいう。ニ猶太教—モーゼの律法を基礎としたユダヤ人の宗教。唯一の神エホバを信仰し、ユダヤ人は神によつて選ばれた民族だと信じる。當時、ヨーロッパではユダヤ人に対する迫害がげしきかつた。なお、クロステル街の近くにはユダヤ街 Jüdisch-str. もある。

三 薄きこがね色一隅外の詩「扣鈕(ぼたん)」(明治三十七年五月作、日露戦争従軍中に作られたもので、留学時代のベルリンの思い出をうたつた詩)に「えばれつとかがやきし友／こがね髪ゆらぎし少女」という一節がある。
四 余に詩人の筆なれば一初出一余に小説家の筆なれば一

五 愁を含める目一愁いをおびた美艷(びえん)の女性は一隅外の好みだつたらしい。「独逸日記」にも「ルチウスといふ二十五六歳と覚しき処女の……面に憂を帯びたるもあり」(一七七年一〇月三日)。「女あり、眉頭常に愁を帯ぶ」(一八八年九月五日)などの記事が散見する。

七 何故に一顧したるのみにて……一恋しきな愛の出会いが語られている。「舞姫」の恋愛は「近代的な人格觀念にもとづく恋愛ではない……換言すれば人間的な恋愛である」(笹田友一)という説がある。悲劇の誘因を太田とユリスの愛そのもののなかに見ようとするのであるが、いかにあれほど臆病な太田の心が、彼の出会いによつて捉えられ、この設定は、彼の恋愛がただゆきずりのたわむれではなかつたのを意味

来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は密住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向ひて、凹字の形に引籠みて立てられたる、此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し佇みしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、銷したる寺門の扉に倚りて、声を吞みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なればこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物聞ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遭ひて、前後を顧みる邊なく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫果なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大胆なるに呆れたらう。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色に形はれたるけけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが耻なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは慥はぬに、家に一銭の貯だになし。」跡は歔歔の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり。

している。エリスは太田にとつて、やはり「眞に愛すべき人」だったと見てよい。

へところへ——当地(ベルリン)に。九彼——後出のヴァクトリア座の座長シャウムベルヒを指す。

二恥なき人とならんを——恥知らずな人間になる(シャウムベルヒに操を売るような破目になる)のを救つてくれ、の意。

二恥ぢて我側を飛びのきつ——前後をかえりみる、いとまもないほど動顛(どうてん)しながら、なお少女らしい羞恥をみせるヒロインの可憐さがたくみに描かれてゐる。隅外の構想が、エリスの処女性の強調をふくむのは明白である。

三エリス——補注九

三獸綿——未詳。長谷川泉によれば、明治十六年刊の「百科全書」「織工篇」に「毛綿製製——「毛綿混織布」などの語が見える。この「毛綿」にあたる隅外の造語か。

四ふと油燈の光に透して戸を見れば——原稿には「此時に心づきて戸の面てを見れば」とあり、初出でこゝ訂正された。

五これすぎぬといふ——このエルンスト、ワイゲルトというのが、死んだという父親の名前であらう、の意。

六「マンサルド」——mansarde(仏)二重勾配(こうばい)のいわゆるマンサード式屋根の屋根裏部屋。最初の設計者であるフランスの建築家

Jules Hardouin-Mansard (1646—1708)にちなんでこの名がある。

七価高き花束——エリスの豊かな情操と趣味が暗示的に描かれている。

(以下は八頁の注)

一燈火に映じて——潮したり——原稿には「余の入りしとき紅を潮しぬ」とある。初出「燈火に映じて微紅を潮しぬ」

二貧家の女に似ず——エリスの天性の麗質がここでも暗示される。太田にふさわしい女性に彼女を成長させるための伏線である。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始めてわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

人を見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、缺け損じたる石の梯あり。これを上ほりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。少女は鑄びたる針金の先きを振ち曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老嫗の声して、「誰ぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老嫗にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に会釈して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老嫗は慇懃におのが無礼の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩へる臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭の支ふべき処に臥床あり。中央なる机には美しき甍を掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列べ、陶瓶にはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帯びて立てり。

三少し訛りたる言葉―下層社会に育ったエリスの教養の低さを示している。

四「キクトリア」座―Victoria Theater ウンテル・デン・リンデンの南約二キロ、グナイゼナウ街 Gneisenau-Str. とベルリアンス街 Belle-Alliance-Str. の交又するあたりにあった。ベルリンでは二流の劇場である。三身勝手なるいひ掛け―金を貸す代償に、エリスの貞操を要求したのである。六「マルク」Mark ドイツの貨幣単位。鴉外の在独中の演説「日本陸軍衛生部の編制」によれば、当時、四マルクがほぼ一円に相当した。また「独逸日記」には下宿の「房賃(部屋代)」は月ごとに四十馬克(マルク)、午餐と晚餐と五十馬克、これに薪炭料、衣を濯(あら)ふ料など合せて百馬克ばかり(明一七・一〇・二三)となる。なお、鴉外の給与は年間、三千乃至四千マルクだったらしい。

七「オペンハウエル」Arthur Schopenhauer (1788―1860) ドイツの哲学者。現象としての世界は自我の表象であり、世界の形而上学上の根本原理は生きようとする盲目的意志であると説き、人間生活においては意志はたえず他の意志に阻まれ、生は同時に苦を意味するという厭世主義の立場をとった。主著に「意志と表象としての世界」がある。「妄想」参照。なお、以下の一節は、原稿ではじめ「ハルトマンを右にしシルレルを左にして」とあり、推諫(すいこう)して現在のように訂正されたもの。読者への配慮から、当時の日本ではほとんど知られていないハルトマン(妄想二五八頁注五参照)を捨て、厭世哲学の祖としてより一般的にシヨオペンハウエルをえらんだのであろう。

八「シルレル」Friedrich von Schiller (1759―1805) ドイツの詩人、劇作家。処女作「群盗」以下「たくみと恋」「ウイルヘルム・テール」などを書き、ゲーテとともにドイツ古典主義の黄金時代を築いた。鴉外に「シルレルが医たりし時の事を記す」「シルレル伝」がある。

彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く哀なるは、貧家の女に似ず。老嫗の室を出でし跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシャウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「キクトリア」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を拵きて還し参らせん。縦令我身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をばづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らずべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のために出したる手を唇にあてたるが、はら／＼と落つる熱き涙を我手の背に澀ぎつ。

嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我僑居に來し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我説書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同郷人にさへ知られぬれば、彼等は速ににも、余を以て色を舞姫の群に漁するものとしたり。われ等二人の間にはまだ癡騷なる欲楽のみ存じたりしを。

その名を斥さんは憚あれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余が屢々芝居に出入して、

丸凝然なる欲楽一凝、睽ともにおろかの意。肉の交わりのない無邪氣な恋の喜びを指すのだから「それを凝然と睽するところに」鵬外のたぐまぬ恋愛観、成熟した大人の感想がある。

「官長の許に報じつゝさきに」『麗経』である。この豊太郎の免官の事情には、留学当時の鵬外の体験が反映していたようである。たとえば『独逸日記』明治二十年六月三十日に「武島務(軍医)帰朝の命を受く……福島(福島安正、在独陸軍留学生取締)の谷口(谷口謙、鵬外と同期生の軍医)の讒(さん)を容れて此命を下し、者の若(ごと)し」とあり、おなじく十一月十四日には、鵬外自身がドイツ陸軍の隊附軍医の勤務を命ぜられたことに関して、「或は谷口の要求にはあらずや。例の陰険家ゆゑ万事注意せられよ」という友人の忠告が届いたことを記録している。

二母の死と補注一〇

三、耻づかしき業——鵬外の「自作小説の材料」に、「小芝居の舞妓といふものは、巴里の方でいふ『ドミモンド』即ち上等の私娼の類が多い」とある。「ドミモンド」は *deminonde* (仏) 売春婦の群れをいう。

三「クルズス」——Kursus (独) 課程。講習。

四、ハックレンデル——Friedrich Wilhelm von Harklander (1816—77) ドイツの作家。軍人小説やユーモア小説を書いた。鵬外も「ふた夜」などの短編を訳している。

五、当世の奴隷といひし——ハックレンデルの小説「エーローッパ」の奴隷生活「Europaische Sklavenleben 1854」を指す。機智に富んだ逆説を弄して、エーローッパの擬似奴隷制度についてとくに宮廷劇場の踊り子を例にとりながら批判している。

六、「コルポルタアジエ」——Colportage (仏) 行商。流布などの意。

七、師弟の交り——豊太郎はエリスを、愛の対象にふさわしい女性に育てあげる。彼らの恋愛がかりそめの遊戯でなかったことを示す。

女優と交るといふことを、官長の許に報じつ。さらぬだに余が頗る学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に伝へて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命を伝ふる時余に謂ひしは、御身若し即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らんには、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とかうと思ひ煩ふうち、我生涯にて尤も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通は殆ど同時にいだしゝものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をこゝに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時まででは余所目に見るより清白なりき。彼は父の貧きがため、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつりに応じて、この耻づかしき業を教へられ、「クルズス」果てゝ後、「キクトリア」座に出でゝ、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隷といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋かれ、昼の温習、夜の舞台と緊しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝なれば、親腹からを養ふものはその辛苦奈何ぞや。されば彼等の仲間にて、賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふなる。エリスがこれを遁れしは、おとなしき性質と、剛氣ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物読むことをば流石に好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジエ」と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識る頃より、余が借しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きし

一 彼が身の事に関りしエリスとの恋愛が免職の一原因だったことを指す。

二 数奇—ふしあわせ、不幸。「数」は命数、運命、「奇」は不偶の意。

三 我命—自分の運命（を決すべき時）。

四 相沢謙吉—モデルは賀古鶴所（1865—1931）浜松出身で東大医学部卒。同窓に鷗外がいて、終生親交を結んだ。日本における耳鼻咽喉科学の創始者として知られる。

五 天方伯—モデルは山県有朋（1838—1923）山口出身で軍人、政治家。元帥、公爵に進み、軍部・政界の実力者として陰然たる勢力があった。当時は内務卿、伯爵。↓補注一

六 免官の官報に出でしを見て—原稿「官を免ぜられしを聞くと共に」。

七 通信員—「自作小説の材料」に、「風俗とか土地とかいふものには、幾等か注意をして書いた積りです。日本から行つた貧乏な書生で、新聞社の通信員などとして暮す人は随分ありますから」とある。

ヘキヨオニヒ街—ケーニッホ街 Königstrasse 前記古伯林のほば中央部を東西に通ずる大通り。クロステル街と直角に交する。

10 休息所—Ruhesitze 新聞統覧所を兼ねる。

11 取引所—Burse 古伯林の西北隅、ケーニッヒと街から約三〇〇メートルのところに証券取引所があった。

二 学上の舞—身のこなしのきわめて軽やかな舞。「飛燕外伝」に「漢ノ趙飛燕（ちようひえん）能ク掌上ノ舞ヲ作（な）ス」とある。飛燕は前漢の孝成帝の皇后で、歌舞が得意だった。

三 我学問は荒みぬ—原稿に「我が学問は退きたり」とあり、現在のようには推蔵されている。一種の反語的表現である。かつて学ぼうとしていたような体系的、本来的な学問に遠ざかった淋しさと同時に、その代償として得たものを自負する想いもこめられている。

三 劇場よりかへりて、椅に寄りて—原稿「椅

ときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に関りしを包み隠しぬれど、彼は余に向ひて母にはこれを秘め玉へと云ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

嗚呼、委くこゝに写さんも要なけれど、余が彼を愛づる心の俄に強くなりて、遂に離れ難

き中となりしは此折なりき。我一身の大事は前に横りて、洵に危急存亡の秋なるに、この行ありしをあやしみ、又た誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我数奇を憐み、又別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかゝりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にこゝに及びしを奈何にせむ。

公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。このまゝにて郷にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ。さればとて留まらんには、学資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯長に説きて、余を社の通信員となし、伯林に留まりて政治学芸の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家をもうつし、午餐に往く食店をもちへたらんには、微なる暮しは立つべし。兎角思案する程に、心の誠を顯はして、助の綱をわれに投げ掛けしはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼等親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合せて、憂きがな

にも楽しき月日を送りぬ。

朝の咖啡果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出で、彼此と材料